

- 1998.10 COP3以降の地球温暖化対策に対するCASAの見解 (日・英)
 11. 日本の環境NGO6団体による京都会議以降の日本の温暖化対策についての分析 (日・英)
 COP4に向けてAANEAとして共同声明 (英)
 11.13 CAN (気候行動ネットワーク)「COP4における大臣への提案」・短編 (日・英)
 CAN (気候行動ネットワーク)「COP4における大臣への提案」・長編 (日・英)
 12.3 COP4プレスリリース「交渉の停滞は許されない」
 1999.1.10 気候変動枠組条約第2回国別報告書詳細審査に対するCASAの意見書 (英)
 1.29 「地球温暖化対策に関する基本方針 (素案)」ブロック別ヒヤリングにおける提案
 「地球温暖化対策に関する基本方針 (素案)」に対する意見陳述原稿

CASA 出版物紹介

- 1992.5 ビデオ「湾岸戦争による環境破壊」 7000 (2000) 送料込み
 1993.5 「地球サミット資料集」
 1996.6 ブックレット「しのびよる地球温暖化」かもがわ出版 550 (500) 送料別
 1997.10 「CO2排出削減戦略の提言」要約版 1000 (800) 送料込み
 「CO2排出削減戦略の提言」本編 5000 (3500) 送料込み
 1998.5 「地球温暖化防止対策を推進するための政策と措置についての提言」 1000 送料別
 7. 「みんなで考えようダイオキシン」 100 送料別
 9. 「温暖化を防ぐ快適生活」かもがわ出版 600 (550) 送料別

CASA Letter 紹介

- 1991.2 No.1 92年UNCEDへ向けCASA理事会
 8. No.2 “地球サミット”
 11. No.3 地球サミットを成功させるシンポと集い
 1992.2 No.4 世界NGO会議でCASA提言
 5. No.5 “地球サミット”に何を提言するのか
 7. No.6 地球サミット閉会成果を上げた世界NGOの活動
 12. No.7 パネルディスカッション「環境基本法を考える」開催される
 1993.5 No.8 “グローバルフォーラム'94”開催
 9. No.9 持続可能な開発に関する委員会(CSD)に井上氏CASA代表として参加
 11. No.10 “グローバルフォーラム'94”概要まとまる
 1994.4 No.11 CSDへ世界8地域のNGO代表が決定
 8. No.12 「環境基本計画シンポジウム」を開催
 1995.2. No.13 CASAが国連の経済社会理事会(ECOSOC)の登録NGO(ロスター)に
 12. No.14 気候変動枠組条約第3回締約国会議、京都で！ベルリン気候サミットの報告
 1996.9 No.15 COP3、来年12月に京都で開催！
 1997.4 No.16 第7回総会を開催-COP3への取り組みの強化などを決定
 7. No.17 国連環境特別総会(地球サミットII)開催！
 10. No.18 CO2排出削減戦略の提言を発表-2010年CO2排出20%削減は十分達成可能！
 11. No.19 12月1日 COP3いよいよ開幕
 1998.1 No.20 COP3京都議定書を採択して閉幕-京都議定書の評価と今後の課題
 4. No.21 CASA第VI期地球環境大学5月開講
 6. No.22 地球温暖化防止対策を推進するための政策と措置についてCASA意見と提言を発表！
 10 No.23 西淀川裁判 国・公団と勝利和解/国内の地球温暖化防止政策課題
 1991.1 No.24 21世紀まであと2年/COP4-停滞する交渉・COP4参加者体験記

CASA 設立 10 周年によせて

CASA 設立 10 周年によせて、国内外の環境 NGO よりお祝いのメッセージを頂きました。他の環境 NGO との連携は、CASA 設立当初より、重要な活動目的の 1 つです。大気公害被害者支援、地球サミットへの参加、東アジア大気行動ネットワークそして、地球温暖化京都会議と、国内外の NGO との連携が、問題解決に大きな役割を果たしました。これらからも協力関係を維持・強化し、共に 21 世紀にむけて発展し、環境問題解決のために努力していきたいと考えます。メッセージをお寄せいただき、どうもありがとうございました。

気候ネットワーク・ヨーロッパは、気候行動ネットワークの西ヨーロッパのメンバーを代表し、貴団体の設立 10 周年記念を心よりお祝い申し上げます。私どもは、貴団体の活動は国際的にも重要で、また、気候変動問題を解決する上で、日本は、重要な役割を果たすと考えます。というのも、日本は、相当の温室効果ガスを排出しており、国際社会において、温暖化を防止するための活動を触発し、奨励する役割を果たす国として重要だからです。

CASA は、国連の交渉プロセスにおいて、真に活躍している団体です。多くの政府代表者が、CASA の意見と創造的な提案に強い関心をもっています。ヨーロッパは、産業効率や自動車技術等の分野でもっと日本から学ぶべき点が多くあります。しかし、原子力に代わる実行可能で短期的な対案という

日本が抱えるより緊急の問題に対し支援することもできます。

気候ネットワーク・ヨーロッパは、貴団体の 10 周年を心よりお祝い申し上げますと共に温暖化問題における今までの変わらぬ協力にお礼を申し上げます。

これからもより強い協力関係が続きますよう、お祈り申し上げます。

1992年2月20日

気候ネットワーク・ヨーロッパ
 デリア・ヴィラグラサ (代表)
 リアン・サルター (エネルギー専門家)
 リン・クラーク (コーディネーター)
 インガ・レナ・ヘニッヒ (テクニカル・スタッフ)
 マレク・ハルドルフ (コンサルタント)

CASA 第 8 回総会および 10 周年記念シンポジウムのご成功を心よりお祝い申し上げます。

貴会が設立されて早や 10 年の歳月が流れ、この 10 年間のご活動とその蓄積は、日本は勿論のこと、世界の NGO として信頼され、評価されるものとなられたことに敬意を表します。

私たち大気汚染の公害患者の会としてはたいそうお世話になりました。西淀川大気汚染公害訴訟をはじめ数々の大気裁判に大きな力をいただきました。裁判では勝利を重ねてきておりますが、大気汚染の状況は、汚染の世界的な広がり、新たな汚染物質など、一向に改善されておらず、ますます貴会のご活躍が期待されるどころです。

私たちも生きていくかぎり、次代によい環境を残したいと頑張り所存です。貴会のご発展を祈念して連帯のメッセージと致します。

1999年2月20日
 全国公害患者の会連合会

CASA 設立から 10 年にわたり、その名にありますように、地球環境と大気汚染について市民の立場から貴重な活動を続けてこられました。大気汚染の根源を差し止めるたたくは日本に不可避であった社会経済構造の転換を加速させ、今、市民による地域再生へと、新しい挑戦がなされていることに敬意を表します。

また、1990 年代から地球環境問題に取り組み、今日まで継続してこられた蓄積は、既に気候変動の影響が現われている一方で実効性ある対策がとられていない日本の現状にたらし、貴重な政策提言の基盤をもたらしています。

将来世代への私たちの責任を日本と世界の市民とともにさらに果たしていられるものと期待しています。

1999年2月20日
 気候ネットワーク代表 浅岡美恵

地球環境の保護は、20世紀から21世紀に向おうとしている今日、地球におけるすべての国々での最優先課題であるべきです。政府・産業界の論理が優先されがちな日本社会においても、市民が連係し国境を超えて活動するNGOの存在は益々重要性を帯びてくるものと思われま

す。貴団体の、特に地球温暖化防止対策ほかにおける具体的な提言は、NGOが政策提案能力を身につけ、政府と対等に議論していく上での貴重な活動例です。NGOを支援する人々、NGOを通じて社会活動をする人々を多いに勇気づけるものです。

日本社会を変革し、次の世代のため、そして生態系の維持のためにも、一人でも多くの市民の参加を得て、地球環境を保護していきましょう。

貴団体の設立10周年を心からお祝い申し上げます。

1999年2月20日
グリーンピース・ジャパン
事務局長 志田 早苗

CASA 設立 10 周年によせて 世界中から届いた メッセージ

CASA10周年おめでとうございます。

過去10年間、世界中の環境保護団体の焦点は、酸性雨、オゾン層の破壊、地球の温暖化といったような問題に関係するまでに発展してきました。わたしたちは今「地球規模で考え、地域レベルで行動する」という理念に向って進みつつあります。環境保護団体はそのような発展の必要性を認識しその発展を擁護することにおいて、常に一般の人々や政府の先駆けであり、またリーダー的存在であります。

地球環境と大気汚染を考える全国市民会議（CASA）はその流れを認識し、一地域の大气汚染を考える団体から、より広い地域及び地球上の大气環境問題を考える団体へと発展されました。さらにCASAはまた、そのような大気汚染問題に取り組む上において、様々な環境保護団体や他の分野の団体が地域的に、また地球規模で協調し、努力することを助長する上においても、重要な役割を果たされてきました。

10周年という節目を迎えるにあたって、CASAがこれまでされてきた努力と成功にお祝いを申し上げます。今後大気環境を保護する上において、あらゆる成功を収めますことをお祈り申し上げます。

1999年2月20日 中国香港「長春社」
副主席 吳庭亮博士

「地球環境と大気汚染を考える全国市民会議」様の設立10周年を、心からお祝い申し上げます。

この10年、地球サミットの開催、COPの展開など、地球環境問題をめぐる“エポック”こそありましたが、まだまだ課題や山積みです。しかし、これまでの努力と貴重な蓄積をバネとして、さらなるご健闘、ご発展されることを祈念致します。

また、環境に関するNGOとして、他団体も含めて協力し合い、アクト・ローカルの実践を高めてゆきましょう。

1999年2月2日
(社)大阪自然環境保全協会

CASA 設立 10 周年、おめでとうございます。

この10年間、人類の生存に重大な影響をもたらす環境破壊が地球規模で進行しつつあることが一層明白になりましたが、貴団体はそれを防止するために環境NGOのリーダー的存在として活動されてきました。その積極的な活動は、国内外で高く評価されています。

しかし、いまなお人類はこの問題を克服しうるに十分な展望を切り開くに至っておらず、ますます環境保全運動の役割は重要性を増しています。環境と、人間の命と健康を守る社会を実現するという、国際社会と未来世代に対する私たちの責務を果たすために、今後ともに努力を積み重ねていきましょう。

1999年2月20日
日本科学者会議

貴8回総会および記念シンポジウムのご成功を心からお祝い申し上げます。

地球温暖化問題や地域の大气汚染問題など様々な地球規模の大气問題に取り組んでこられた貴団体に敬意を表します。

又、私たち公害をなくす会の運動への日頃のご支援、ご協力に厚く感謝申し上げます。

長く続いた自民党政治で財界主導の巨大開発、公共工事などによる環境破壊は目に余るものがあり、今も公害に苦しめられる被害者は増え続けています。

その上にゴミ・廃棄物、ダイオキシン問題の深刻化、有害化学物質など環境汚染物質の広がりで子どもや孫の世代までもが健康に生きる権利が侵されていないか心配が絶えません。

直前に迫った知事選挙は環境問題を争点におしあげ開発優先から環境優先へ流れを変える絶好の機会です。

安心して暮らせる地球環境を取り戻す為に、又、公害被害者の救済、地域、生活、自然環境のこれ以上の破壊を許さない運動に共にがんばりましょう。

貴団体の今後の一層のご活躍をお祈り申し上げ、連帯のご挨拶を送ります。

1999年2月20日
大阪から公害をなくす会 会長 芹沢芳郎

気候変動・温暖化の問題に代表されるように、環境の分野においても、いまほど地球的な視野・対応が求められているときはないといえます。

海外の動きを国内に伝えてゆくのみならず、これからはよりいっそうの海外への情報発信と連携が求められる時代となりました。またその経済・貿易活動が与えている世界的な規模の大きさにも関わらず、環境に関わる日本の市民運動の抱える問題点が指摘されて久しいことも確かです。

その中においても、大気という地球全体が共有する資産を守るべく活動されてきたCASAは、いち早く海外の市民運動との連携の重要性を認識され、パイオニアとなられてきました。

地球の友ジャパンといたしましても、CASAが日本の市民運動を次のステージへと導く要であることを心強く感じつつ、その創立10周年に心からの謝辞を送らせて頂きます。

1999年2月20日

地球の友ジャパン
気候変動・エネルギーキャンペーン
小野寺ゆうり

地球環境と大気汚染を考える全国市民会議（CASA）の第8回総会と設立10周年記念シンポジウムの開催にあたり、みなさまの活動に敬意をこめて、ひとことご挨拶申し上げます。

言うまでもないことですが、今日の地球環境問題は、私たちの生活様式とそれを支える社会システムに密接に関係しており、私たち自身がグローバルに問題を考え、身近な地域で行動することが極めて大切になっています。

また、環境保全に向けた国際合意や国内の法制度整備が一定にすすんでくる中で、市民としての力量をより一層高めていくことが求められます。

このような中で、市民レベルのシンクタンクとして、CASAの活動が益々発展されることを祈念するものです。設立10周年、誠におめでとうございます。

1992年2月20日
日本生活協同組合連合会

CASA 設立 10 周年、心からお祝い申し上げます。

モンゴルのNGOは、大気環境を守るため、大気汚染、オゾン層の破壊、酸性雨、地球温暖化を含む地球規模での問題を解決するための、CASAの多大なるご支援に、いつも支えられてきました。

わたしたちモンゴルのNGOはAANE（東アジア大気行動ネットワーク）の枠組みの中で、今後もCASAと連携していくことでしょう。

CASAの様々な活動に成功と繁栄を心からお祈り申し上げます。

1999年にウランバートルでお目にかかれることを楽しみにしております。

1999年2月20日
オリソン・アマルクフ
J・ツェレンデレク
モンゴル自然環境保護連合（MACNE）

Ts・アディシュレン
A・ナムハイ
開発と環境NGO

Message from the World

For CASA's 10th Anniversary

気候行動ネットワーク・ラテンアメリカのエドワード・サンフェザより、CASAがこれまで大気汚染と地球環境の保全のために大変重要な貢献をされ、その創設から10周年を迎えられたことに対し、心からお祝いを申し上げます。

この喜ばしい日を迎えるにあたっては誠に遺憾でございますが、我々がかねてから切望しておりました、この日を皆さまとご一緒し喜びを分かち合いたいという思いが、ついぞ叶わぬものとなってしまいました。はるか遠路に阻まれてのことではございますが、時に難儀なこの距離も、せめて我々の心においては感じられないのが救いでございます。

我々はまたこの場をお借りいたしまして、CASAが昨年度を通じて我々を支え、アルゼンチンやラテンアメリカのNGOのCOP4への参加を大いに盛り立て下さいましたことに、改めて御礼を述べさせていただきます。

Foro del Buen Ayreの設立と、COP4期間前後に及んだメンバーによる幅広く活発な活動は、アルゼンチンの人々やNGO運動に対し重要な足跡を残しております。同じくラテンアメリカのNGOによるCOP4への参加は、南米諸政府の姿勢に一定の影響を及ぼしたものだと言えるでしょう。双方の件に関しまして、CASAの皆さまからは大変貴重なご支援を頂戴いたしました。

最後になりましたが、皆さまが将来に渡りご尽力をつくされることに、ご多幸をお祈りし、お祝いのメッセージと代えさせていただきます。

1999年2月20日
気候行動ネットワーク・ラテンアメリカ
エドワード・サンフェザ

NGOという存在が市民権を得るに至るまで、数多くの方が未来を構築するという夢を捨てずに一歩一歩取り組まれてきました。

ここ東北の地においても、環境問題に取り組んでいる者であれば“CASAという団体を知らぬ者はいない”というほどに作り上げてきたCASAの皆様のご苦労はいかほどのものであったのだろうかと思ひます。

また、現在取り組まれている連続講座の“参加者の立場に立たれた運営方法”など、NGOが活動を行うにあたって決して忘れてはいけない基本的な姿勢を貫かれていることは、CASAが将来に向かってさらに発展することを予感させます。

新しい時代に向けて、青い地球を子どもたちの手へ引き継げるよう「環境を守るとりで」としてこれからも頑張っていたきたいと思ひます。

Message from the World

For CASA's 10th Anniversary

一昨年の温暖化防止京都会議の際には色々な件でお世話になりました。気候変動防止戦略研究会のような研究者のネットワーク化を是非続けて頂きたいと思ひます。

東アジア大気行動ネットワーク(AANE)の幹事役もしていただいております。

熱帯林を初めとする世界の森林の減少、劣化の問題についても、2000年あたりに国連の場で国際森林条約に関する討議などが予定されていますので、こちらもご参加願えれば幸いです。

1999年2月20日
熱帯雨林行動ネットワーク スタッフ一同

1999年2月20日
(財)みやぎ・環境とくらし・ネットワーク
理事長 木村修一

2000年という新しい1000年の幕開けが近づきつつある今、わたしたちの母なる地球は予測できない未来に向かっていきます。1998年という年は平均気温が観測記録上、最高を記録しただけでなく、天候に関係ある災害により被った被害額も新しく記録をぬりかえました。昨年1年間だけで、異常気象のため約32,000人が死亡し、3億人以上の人々が住居を追われました。こうした最近の大災害の中には、人間の活動が原因となっているものもあることは明らかです。

今年の終わりには、世界の人口は60億人を越すでしょう。わたしたちがよりべんりにな生活をもとめることによって、限られた資源の枯渇を加速するだけでなく、やがてわたしたちに害を与える膨大な量の廃棄物を生み出すことにもなります。環境保護論者たちが現在取り組もうとしているほとんどの問題は、固体、液体、気体のあらゆる形の廃棄物と関係があります。これら全ての問題はあまりにも複雑で、それが影響するところはあまりにも大きいので、単純な答えでは解決できません。したがってわたしたちは共に力を合わせてより良いものを構築していかなければならないのです。

非政府組織として、わたしたちNGOは、この重要な問題において政府組織より幾つかの有利な点をもっています。わたしたちには政府が負っているような官僚的な重荷がないのです。従ってわたしたちNGOの方がより能率的に、そしてより創造的に仕事をする事ができるのです。NGOには国境がありま

せん。従って、わたしたちは人種、皮膚の色、言語に関係なく、兄弟姉妹のように真に一緒に活動することができるのです。それはわたしたちNGOがより良い未来に向けて共通の目標をもっているからなのです。最近では、わたしたちは国内外問わず、友好的な環境グループ間でますます強固な連携をもつようになりました。そしてわたしたちは実際に幾つかの成功した結果を出してきました。

10年前、勇気ある人たちが集まって、環境問題を考えるためにCASA(地球環境と大気汚染を考える全国市民会議)を設立しました。今日までの10年間、あなたの方の粘り強さがあつたから、この組織は国内及び国際的な環境フォーラムにおいて、主要なNGOのひとつになったのです。今後も私たちの行く手には新しい難問が山積していますが、私は、CASAが今後も多くの問題において重要な働きをしてくださるだろうと、心より、信じています。10年後の20周年記念では、わたしたちNGOが子孫の幸せを守るためにどれほど役に立ったかが人々の記憶に残るように、CASAがさらに発展していくことを確信いたしております。

おめでとうございませう。

1999年2月20日
グロリア・クワンジュン・シュ
台湾環境保護連合
コーディネーター、学術委員会、
台湾国立大学 大気科学部 教授

親愛なる同士諸君

CASA創設10周年おめでとうございます。

ロシアNGO、「地理学会及び学術評議会最高幹部会議」「科学公共アカデミー極東支部」及び「環境(エコロジー)に対する公共主導権」協会を代表して、貴団体の創設10周年をお祝い申し上げます。

貴団体は、困難な問題が多々ある時代に、地球の生命の基礎である、大気の保護及び清浄化という複雑な問題を解決するためによく努力されておられます。

貴団体の大気汚染問題解決に向けた尊い行動は、日本のみならず、海外においても世論の良い反響を得ております。

貴団体の歴史は、日本の環境汚染の歴史だと言えらると思ひます。この10年間における貴団体の絶え間ざる努力は、次第に日本の市民の方々の意識を変え、エコロジカルな考え方をもたらしたと思ひます。

私どもは、貴団体の活動経験や、自然の状況に関する情報を交換することに喜びを感じております。そのおかげで、私どもは、難しい越境型大気及び水質汚染、酸性雨、予期せぬ干ばつと洪水等の原因を、より理解することができています。

このような困難で多くの矛盾があるにもかかわらず、時代は来世紀に向けて、私たちの共通の問題を解決するために、貴団体のさらなるご幸福と大きな創造的なご成功と、ご健康そして問題解決のためのエネルギーを求めていると思ひます。

1999年2月20日
バレリー・シマコフ博士
ロシア地理学会科学記
エブゲニー・ガリチャニン博士
公共科学アカデミー極東支部長
ディミル・レブホフ博士顧問
「環境に対する公共主導権」協会極東部長

CASA Letter

FEB .1999

10周年記念・追加号

設立十周年おめでとうございます。今後も、地球環境問題に取り組む市民・NGOのリーダーとして、ますますのご活躍を期待しています。日本のNGOはまだまだ小さなコミュニティに過ぎませんが、お互いに持続可能な活動を発展的に継続できるよう、頑張りましょう。

1999年2月20日

市民フォーラム2001 佐久間智子

かねてより、国内外の環境保全を目指して、貴会議が献身的に御活躍されておられることに敬意を表しております。

このたびは、貴会議が1998年10月に設立されて以来、すでに10周年を迎え、これを記念するシンポジウムが開催されるとの御案内を賜り、誠に有り難うございました。貴会議10周年を心からお祝い申し上げますとともに、当日の総会および記念シンポジウムの御盛會を祈念致します。

私ども「日本環境会議」も、1979年6月の結成以来、すでに20周年を迎えておりますが、今後とも貴会議との連携・協力関係を強めていきたいと念じております。

貴会議のさらなる御発展を期待しております。

1999年2月20日

日本環境会議 (JEC)

事務局長 淡路剛久 (立教大学教授)

事務局次長 寺西俊一 (一橋大学教授)

マレーシア環境技術開発センターは、CASAの設立10周年を心よりお祝い申し上げます。この数年間に、気候変動問題の条約交渉においてCASAの方々と積極的な関わりをもつようになりました。日本国内と世界的な大気汚染問題両方を解決するためのCASAの努力にいつも関心しています。

CASAのような日本のNGOがもっと増え、日本の社会に影響を与えるような政策立案活動が広がることを願います。

これからも、私達との協力関係がより親密に続くことを願っています。2005年にマレーシア環境技術開発センターが20周年をむかえるときに、CASAからメッセージが届くことを楽しみにしています。

日本とマレーシア両国に起こっている深刻な経済不況に負けず、これからも、日本とマレーシアのNGOが、より一層協力していくことを望んでいます。

1999年2月20日

ガーミット・シン K.S

マレーシア環境技術開発センター代表

マレーシア気候変動グループコーディネーター

CASA 設立 10周年によせて

世界中から届いた
メッセージ

地球環境と大気汚染を考える全国市民会議

〒540-0012 大阪市中央区谷町 1-3-17-714 TEL 06-6941-3745 / FAX 06-6941-5699

Citizens' Alliance for Saving the Atmosphere and the Earth

1 はじめに

気候変動問題とは、今や一国のレベルに留まるものではありません。このため急成長を遂げる東南アジアにおいては、もはや地域間協力が不可欠とされています。地球温暖化による環境破壊防止活動を行うすべての組織・団体が情報を交換し、交流を深め、足並みを整える相互提携を可能とするためです。

東南アジア気候行動ネットワーク（以下CANSEAと略）はこうした状況のもと、1991年に結成されました。インドネシア、マレーシア、フィリピンを中心におよそ15の非政府組織により構成され、持続可能なエネルギー開発や天然資源の管理、技術革新とその交流、国際金融協定など、気候変動問題のみならず幅広い関連分野を活動の対象に据えています。

CANSEAはこの地域における気候変動問題に対し広く警鐘を鳴らすべく、メンバー相互の能力を高めていくことをその活動目標に定めています。

2 CANSEAの活動概要

CANSEAの所属団体は各々の母国において、以下に紹介する多彩な活動を繰り返しております。

- ・気候に関するワークショップやセミナーの開催
- ・国際会議や気候変動に関する会合への参加
- ・エネルギー消費と輸送機関など、気候変動に関連するデータや情報の収集
- ・ちらし、ポスター、ブックレット、ビデオなど、普及材料の作成並びに教育

3 気候管理

地球温暖化とは二酸化炭素、メタン、クロロフルオロカーボンなど温室効果ガスの排出量増大による結果として、地球の平均気温が上昇することを言います。これらの温室効果ガスは、化石燃料の燃焼によるエネルギー発電、乗用車、工場からの排出等、様々な人間活動の結果として大気中に放出されています。地球規模による環境破壊を免れるためには、政府、産業界、地方自治体から個人に至るまで、あらゆる立場における猶予なき対応が必要とされている所以です。

各国においては、化石燃料使用の大幅な削減、省エネの促進、公共交通機関の利用推進、産業活動における温室効果ガスの排出削減等により、排出総量を削減する抜本的対策が望まれています。個人もライフスタイルの転換によって、これに協調すべきことは言うまでもありません。それにより一国の政治、法律、経済が大きく変化していくからです。

※ところがこのように大胆かつ先見性のある政治的判断が求められているにも関わらず、実際にこうした選択を下す政府は少数派と言えます。UNFCCCなど国際機関の場においては世界的な支持を得られる対策に

向け議論がなされておりますが、さらに国家間、周辺地域、国レベル、そして国内各地に至るまで、あらゆる立場における話し合いが必要とされているのです。

4 京都議定書をうけて

～より実効性のある京都議定書を～

先進国に対しては、地球温暖化による影響を軽減し、京都議定書をより有意義なものとする確約が求められてきました。排出量削減においては国際的議論に移る前に、国内世論を十分高めるべきであったと言えます。

先進国は途上国に比べ温室効果ガスの排出量が大きく、次世代からの信用性失墜に拍車をかけている状態です。途上国に対し気候変動に影響を与える経済活動の自粛を求める前に、まずは先進国がそれを実行に移すべきなのです。

周知の通り、インドネシアをはじめとする東南アジア全域では、近年深刻な経済危機に見舞われています。これによる排出量の変動は必至で、事実産業界における排出量の減少傾向も見られ、その影響は確実に現れてきています。家庭部門においては、東南アジア地域特有の先祖伝来の暮らしの知恵が今も日々の生活の中で受け継がれています。こうした状況下にある途上国が、なぜ外部不経済を問われて排出削減の責務を負わなければならないのでしょうか？

5 排出削減に向けた日本の先導的役割

日本はアジアを代表する工業国であり、他の先進国の模範となるよう期待が寄せられています。その日本の一都市の名がUNFCCCの議定書のタイトルにされるということは、大変名誉なことであると言えるでしょう。にもかかわらず、ただアメリカの動きに追随するだけでいいのでしょうか？日本には技術を盾に経済成長を遂げる力があり、それをもっと生かすべきなのです。

環境問題を解決するための日本におけるNGOの役割は大変重要なものです。我々は互いに良きパートナーとして共に前進していくために、今後もより一層交流を深め合っていくことを願っています。

最後になりましたが、CASA10周年記念に際し、心からお祝いを申し上げます。

1999年2月20日

気候行動ネットワーク東南アジア
スリャ・ムランダー コーディネーター
ディア・ヌハヤティ